

県内定置網におけるカツオ水揚量の推移

漁業資源課 山下 慶太郎

1 目的

県内に水揚げされるカツオは主に沿岸竿釣及び曳縄で漁獲されるが、直近3か年では定置網による漁獲が増加している。

県内定置網におけるカツオの漁獲動向に関する報告例はほとんどないことから、水揚げデータを入手できた県内2定置の長期的な漁獲動向を整理するとともに、カツオの入網条件を探るため、入網した際の海況について考察した。

2 方法

(1) 水揚量調査

水揚量は県西部の足摺岬東側に位置する窪津大敷組合（以下「窪津大敷」）及び、県東部室戸岬東側に位置する椎名大敷組合（以下「椎名大敷」）の1978～2018年のカツオの水揚量を漁協の電算データ等から集計した。

(2) 入網条件解析

漁獲量の多かった日の水温図や黒潮離岸距離等を元に、カツオの入網条件について考察した。

3 結果及び考察

(1) 水揚状況調査

①窪津大敷（図1・2）

2018年の窪津大敷におけるカツオ水揚量は17.5トンで、集計した1978年以降で最も多い水揚げであった。年間水揚量の長期的な動向を見ると、1982年・1983年・2004年の3か年以外は概ね5トン以下で推移しており、2018年は特異的に水揚げが多かったといえる。

月別では、7月をピークに6～8月の夏季に水揚げが多い傾向が見られた。

②椎名大敷（図3・4）

2018年の椎名大敷における水揚量は24.3トンで、2000年以降では最も多い水揚げであった。年間水揚量の長期的な動向を見ると、1993年までは概ね10トン以上水揚げされ、最も多い1992年には158トンの水揚げがあったが、1994年以降は概ね5トン未満の低水準で推移した。

月別では、水揚げが多いのは5～10月で、6月が最も多く、次いで9月に多い傾向が見られた。

(2) 入網条件解析

2018年の椎名大敷において特に好漁だった日の水揚量及び高知県沿岸高精細水温図（（一社）漁業情報サービスセンター提供）を図5に示した。好漁日もしくはその直前の水温分布では、黒潮本流から椎名大敷のある室戸岬東側への暖水波及が見られた。同時期に県東部の甲浦港では沿岸竿釣船がカツオを1日1隻当たり2トン前後水揚げしていることから、本県東部海域にカツオ漁場が形成していたと考えられ、その魚群の一部が暖水波及に乗って室戸岬沿岸まで来遊したと考えられる。

定置網でのカツオ水揚量と黒潮流路との関係を明らかにするため、1994年以降の5～10月の椎名大敷における日別水揚量と室戸岬南沖における黒潮離岸距離の推移を図6に示した。黒潮が1～2週間程の短期間に30マイル以上離接岸した前後でカツオの水揚げが増加する傾向が見られ、離岸距離の変動が少ない時期はカツオの水揚げも少ない傾向が見られた。同期間の室戸岬南沖における黒潮離岸距離の前週比毎の、カツオ有漁日・無漁日を集計し、それぞれの構成比を比較したところ（図7）、カツオの有漁日の方が前週比±20マイル以上の構成比が高い傾向が見られた。

短期間での黒潮離岸距離の大きな変動は、黒潮小蛇行の東進が原因であることが多いと考えられる。山重（1979）によると、黒潮小蛇行が九州東岸から土佐湾沖を東進すると、土佐湾沖の黒潮流路は凹状から凸に移行し、黒潮本流から室戸岬東岸や土佐湾内への分枝流が発生しやすいことを指摘している。

以上のことから、黒潮小蛇行の東進等に起因する黒潮本流からの暖水波及が沿岸域まで到達することが、室戸岬東側の定置網にカツオが入網する条件の1つであると考えられる。

4 参考文献

山重政則 (1976) 土佐沖の黒潮. 高知県沿岸・沖合域の海況と主要魚種の産卵場 水産業改良普及事業資料 南西海区水産研究所高知庁舎 1-14

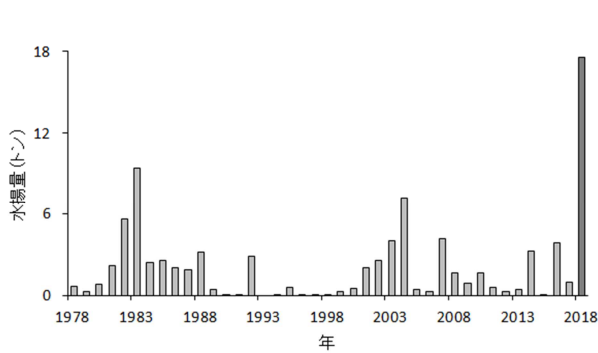


図1 窪津大敷におけるカツオ水揚量

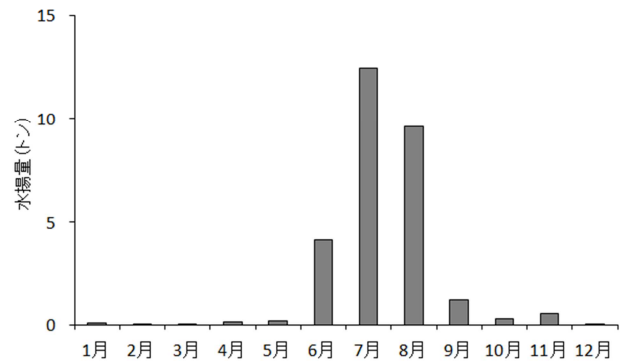


図2 窪津大敷におけるカツオ月別水揚量 (2010-2018年平均)

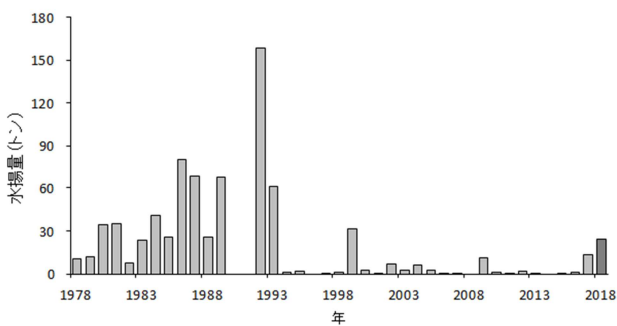


図3 椎名大敷におけるカツオ水揚量

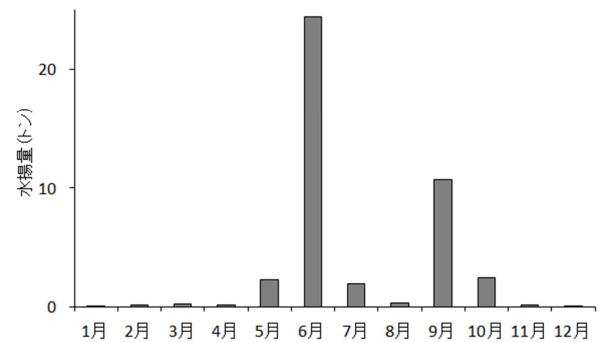


図4 椎名大敷におけるカツオ月別水揚量 (2010-2018年平均)

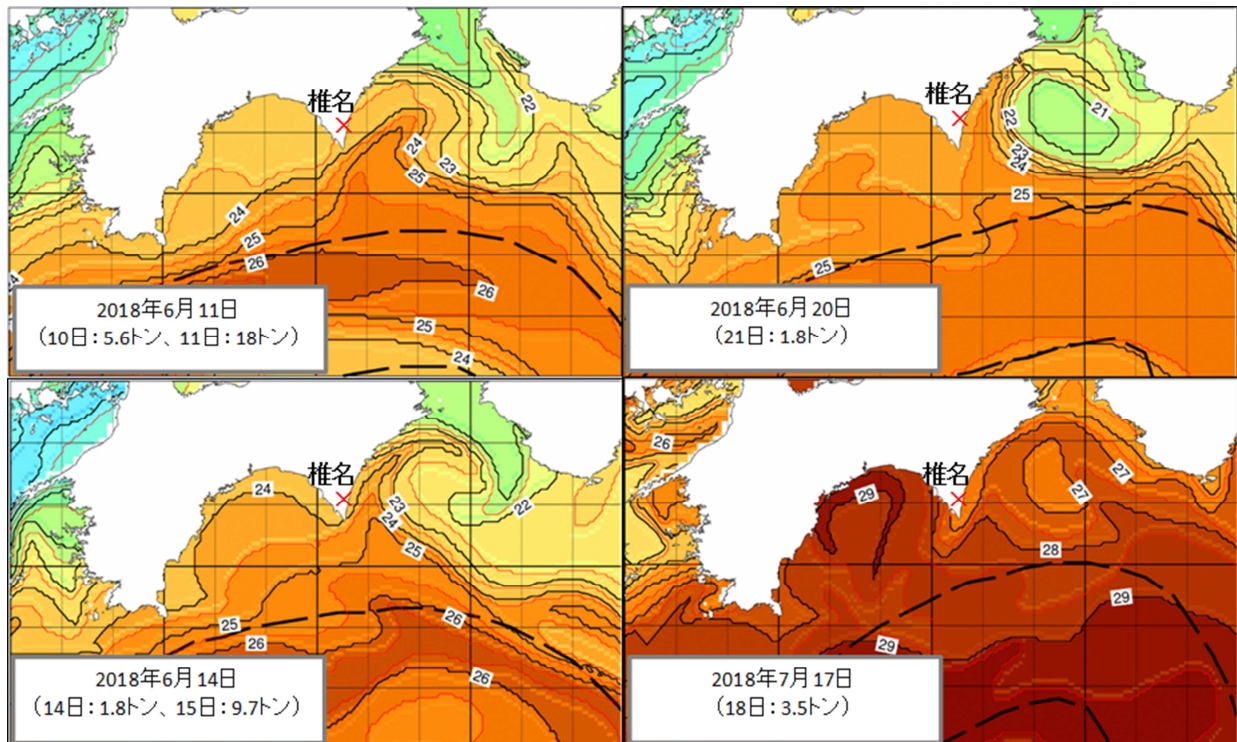


図5 椎名定置におけるカツオ好漁日と水温図

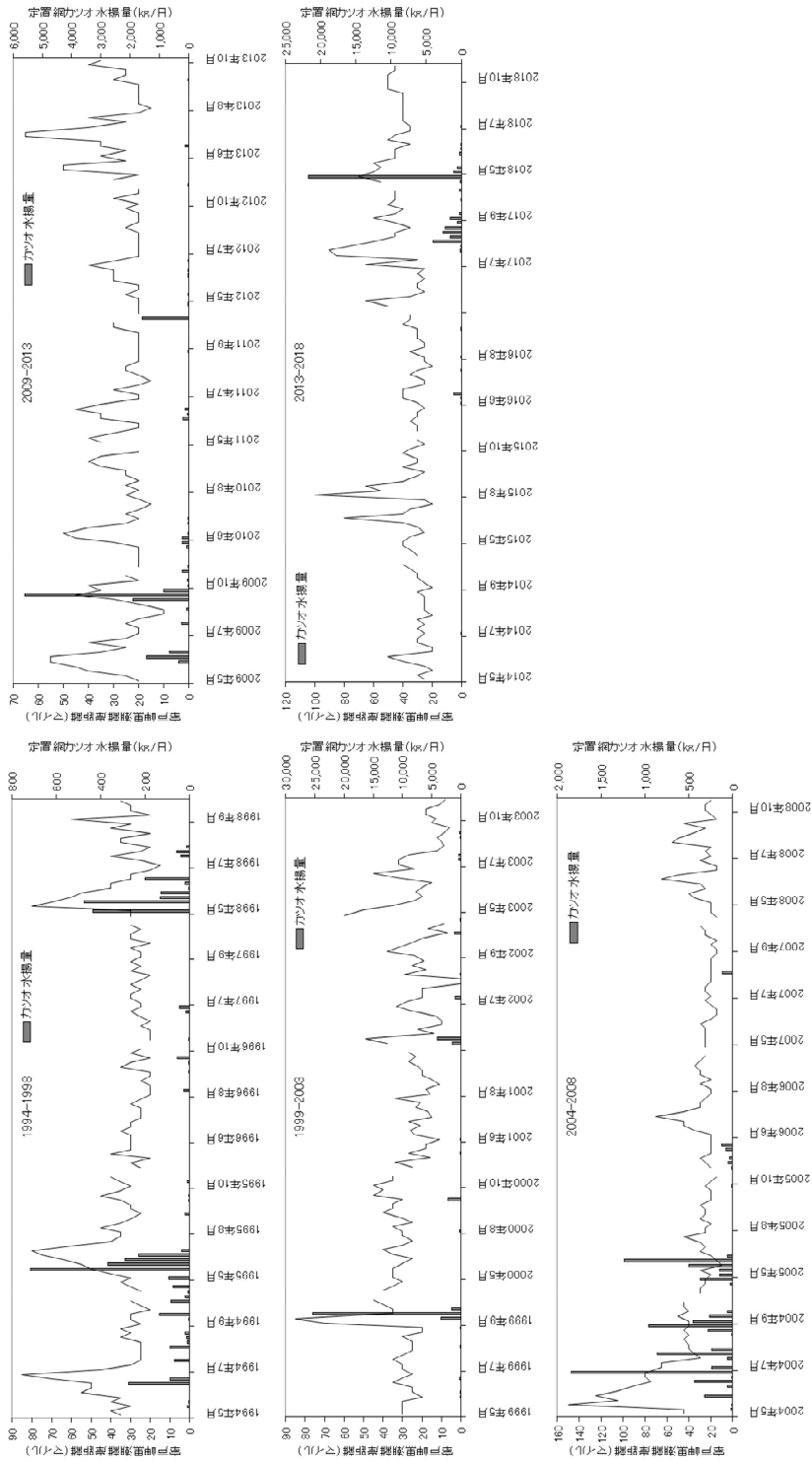


図6 椎名大敷カツオ日別水揚量と室戸岬黒潮離岸距離との関係

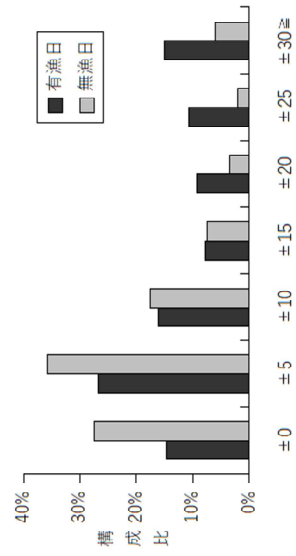


図7 室戸岬南沖の黒潮離岸距離前週比と椎名大敷におけるカツオ漁獲の関係